市民が集まり、憩い、楽しめる緑豊かな場所にいたしましょう

森の中の高知駅

高知を愛する皆様へ（「お知らせ」令和４年２月号）

令和４年２月１日

１月 15 日、初仕事に７人が参集、菜の花が咲く駅南口「みんなの庭」（下の写真）で静かに土いじりをしました。はびこったヨシの根を取り除くのがちょっぴり面倒でしたが、きれいになった地面に新しい草花を植えられそうです。有志差し入れのきんつばをお土産に、皆さん笑顔で別れて行きました。また、後日別動隊が北口駐輪場の植栽を手入れしました。

２月の活動日は１３日（日）09:00～10:30、３月も１３日（日）の予定です。

・・・

緑のまちづくりを考える（５６）　　－「お知らせ」 令和４年２月号コラム －

『木を植えた男』の物語

タイトルに惹かれて、フランスが生んだ大作家のひとりジャン・ジオノの短編小説『木を植えた男』（原作 1953 年）の邦訳を購いました（＝右の写真、1989 年あすなろ書房刊）。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

小説のあらすじ

今から何十年も昔のことだが、第一次欧州大戦前の 1913 年夏、南仏のプロヴァンスを旅した十代の「私」は、山深く草木もまばらな荒野を、飲み水を求め彷徨った末、廃屋に住む初老の羊飼いに助けられた。妻子を失い孤独な男は、残る人生を何か世の役に立つことをして生きていこうと、毎日羊を追う傍ら、ドングリの実を荒れ地に植え続けているとのことだった。

むごたらしい戦争が終わった 1918 年、復員した「私」は再び村を訪ねていた。草木も無かった荒れ地がカシワやブナのみずみずしい森になり、小川まで流れている。植えても無事に育つのはわずか 10 分の 1 ほど。枯れても全滅しても空しさに耐え、老人はミツバチを飼って生計を立てながら独り黙々と木を植え続けていた。荒廃した世に神がつかわしたとしか思えない彼を、それから「私」は 1 年と置かず訪ねるようになる。

最後に老人を見たのは、第二次大戦が終わった 1945 年だった。荒れ地が生命の息吹を取り戻し、廃村に人々が戻って、笑いと活気に満ちていた。死ぬまで木を植え続けた男は、2 年後、近くの養老院で 89 年の生涯をやすらかに閉じた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・